

た。これまでの多くの博物館では、保存担当者が1人か2人いても組織としては存在しませんでした。それで博物館のはたす役割が遂行できるかを、皆さんに問いかけてみたいのです。

博物館の機能はいろいろとありますが、大雑把に考えて、博物館資料・文化財の保存と管理、資料の収集・活用が最大の使命です。展覧会や陳列は活用の部分です。そして、資料の調査・研究がこれまで活動の中心にありました。もう一つ、近年注目されてきた機能が、教育・普及です。これは博物館の基本機能と考えられ、それに沿って運用されています。

しかし実際は、資料の収集・活用に力がこめられているのは当たり前となっています。もう一つの保存・管理についてはあまり力が注がれておらず、非常にバランスの悪い機能の状態になっています。わかりやすくいうと、日本で保存科学の機能を備えている博物館はほぼゼロに近いといってよいでしょう。

私はこれまで機会あるごとに、博物館における保存科学機能の必要性を繰り返し主張してきました。本来の博物館機能を十分に発揮するためには、総合的科学的としての保存科学は不可欠だと考えるからです。

## 九州国立博物館の場合

ここで、九博での対応について、PRも含めて紹介させていただきます。開館して2年と少したちましたが、今年(2007年)10月16日時点での総入場者数は約378万人です。毎日、ほんとうに大勢の方がおみえになっています。九博の掲げている目標は、「学校よりもおもしろく、教科書よりもわかりやすい」ということです。このことは教育・普及にも関係してきますが、保存・管理の機能についても、この目標に沿った取り組みを努力しています。その姿勢をご支持いただき、共感していただいたおかげで、2年で378万人ものご来場をいただいたと思っています。

ちなみに、総入場者の推移は図1のようになります。100万人目のころが九州一円の方、200万人目が九州から瀬戸内あたりまで、現在は300万人で、ほぼ全国の方がおみえになっていると予測しています。

九博は古代「遠の朝廷」の中心地である大宰府政庁をはじめとした古代遺跡の数々に接し、また太宰府天満宮のすぐ近くにあります。九州の特徴は、アジアとの関係が密であることです。そこで、コンセプトを「日本文化の形成をアジアの視点からみる」と設定しています。展示や活動もアジアとの交流をベース

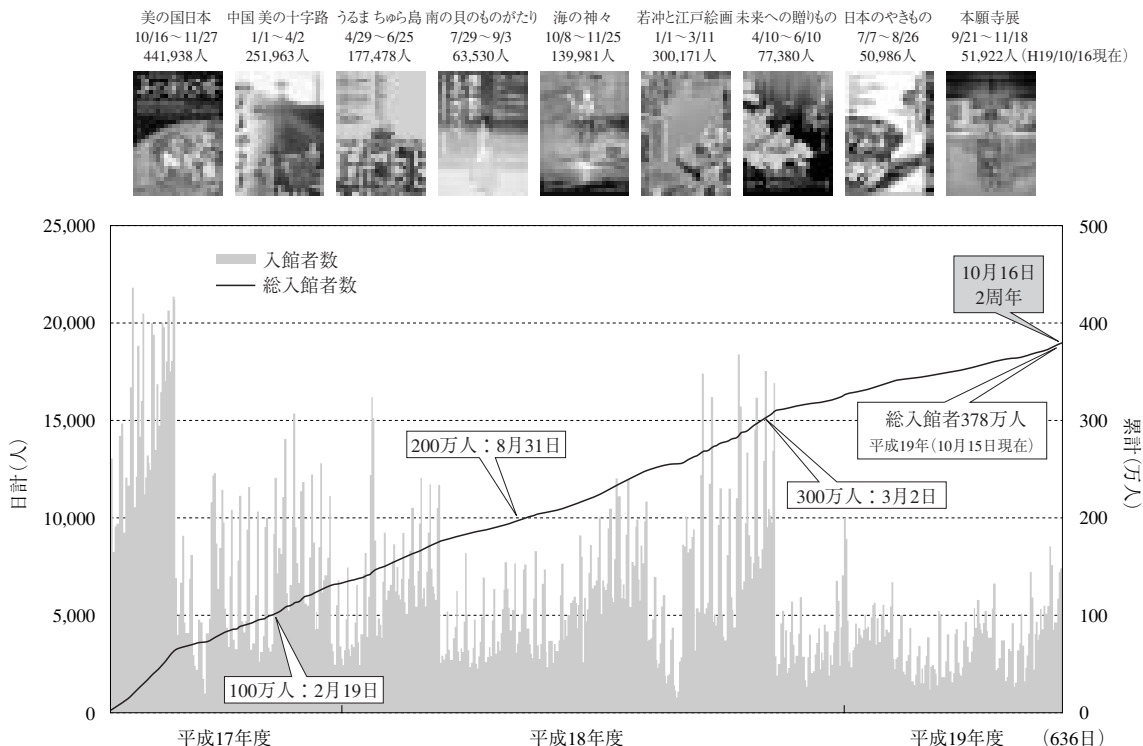
にしての展開です。

## 博物館科学体制の組織化

博物館としての一つの悩みは、多くの人がおみえになると、それにとまなりリスクが生ずることです。空気が悪くなり、ゴミ・虫・カビも発生しやすい状態になります。その点でも、博物館科学による新しい取り組み方が求められています。人で混雑すると二酸化炭素がふえ、具合の悪くなる方もできます。文化財をよい環境で保存することもたいせつですが、よい環境でみていただくこともよりたいせつです。

そこで、博物館科学体制を組織したとき、保存環境を調整・管理する部門、修理・修復を対象とした部門を設置しました。繰り返しになりますが、文化財を保存するためにも、来場者の方々にとってもよい環境とは何かを考え、その環境づくりに一生懸命心がけるわけです。博物館科学は、博物館の機能から生

図1 入館者数の推移 (平成17年10月16日～平成19年10月16日)



ずるさまざまなリスクにもしっかりと対応する必要を感じております。

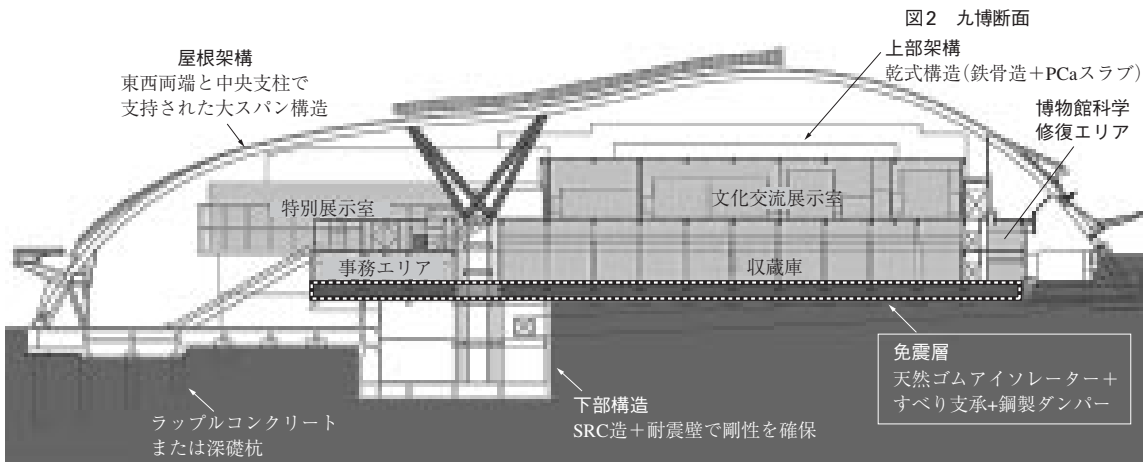
大事なことは、これらの業務をこれまでの博物館では学芸員が担当していましたが、片手間にやるのではなく、より専門的なしっかりと学んできた者が博物館科学を担うべきだということだと考えています。つまり、保存科学の専門家の存在を必要とするわけです。

## 免震装置の導入

人にとっても、文化財にとっても博物館のリスク管理の一つに、危機管理があります。「安心・安全」という観点が不可欠です。その点を考慮して免震装置を導入しました。九博の建物の断面(図2)をみると、外側が最中の皮のようになっていますが、5階建てで、展示の主要な階は3、4階です。2階に収蔵庫をもち、3階に特別展示室、4階に文化交流展示室があります。そして、館の下にある450本ほどの柱に3種類(天然ゴム積層ゴム、弾性すべり支承、鋼棒ダンパー)(図3下)の免震装置が設置されています。こうした免震装置の設置は博物館として初めてのことです。

阪神・淡路大震災で私たちが得た教訓は、「外国からはあまりよい作品を借りられない」ということです。日本は地震が多いからです。借りることができたとしても、保険料がとんでも高くなります。そのような問題を、どう解決していくかがより豊かな展示を目指したとき、大きな課題となります。

この免震装置を設置する段階では、九州北部は地震の少ない地域だといわれ



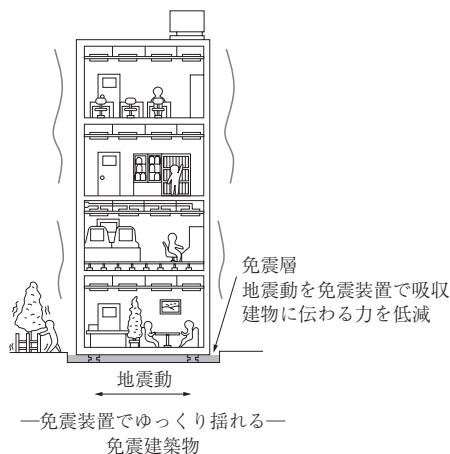
# 総合科学 としての 保存科学 を備える

ただけに、その必要性をめぐって担当者たちは非常に苦労していました。しかし、開館する数か月前の平成17(2005)年3月20日に福岡県西方沖地震(マグニチュード7)が発生して、免震装置の成果が十分確認できました。

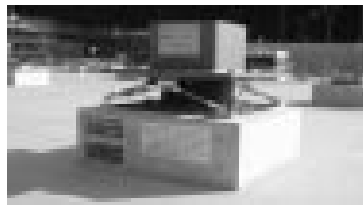
このような取り組みは少なくとも学芸員が行うものではありません。博物館科学を専門に行うものが中心となって、博物館全体で体制を組んで行うべき危機管理と思っています。そして、私が誇りに思っていることは、この免震装置は、申し出があれば一般市民にもいつでも見学していただける状態にしていることです。事実、大勢の人たちが見学されています。しかも、その方々にボランティアの人々が対応しています。そのような組織づくりもこれからの博物館としてはたいせつなことです。

図4は、4階の文化交流展示室にある中国遼代の石塔です。高さが6 m 50 cm あります。展示するにはかなり危険度が高いのですが、石塔にとっても、これを見る人にとっても、支柱で各部分を支えるとともに下部に特別な免震装置(図3)を設けているため安心・安全です。

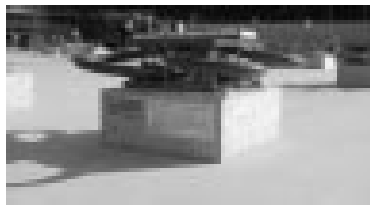
図3 免震装置



天然ゴム積層ゴム



弾性すべり支承



鋼棒ダンパー